

ゆく夢くる夢

今年もまた大勢の人で賑わった。地元宇和島市^{みずがうら}水荷浦地区のイベント「ふるさとだんだん祭り」は、国の重要文化的景観にも選ばれている段畑で栽培される、早堀馬鈴薯の収穫祭である。二つの太陽の恵みで全国でも早い出荷が叶う。二つとは、通常の太陽の温もりとそれに暖められた段畑の石垣の温もりである。その石垣には先人の汗と苦悩が染み着く。日本の段畑を表現する「耕して天に至る、以て貧なるを知る」とは、まさにこの地のことだった。平均勾配40度、急峻な段々づくりしか許されない開墾と栽培、運搬は、人目をはばかりに村民の体を変形させてもなお、子が産まれる毎に一枚ずつ天を目指すほかない貧しさを誰よりも知るが故に「耕して天に至る、以て勤勉^{せきじん}なる哉」と、昔人は切り返したという。

村人はその後の食^{ぶち}い扶持を甘藷へ求め、さらに漁獵へ、その漁獵も漁獲から養殖へ、その養殖は更に魚類から真珠へと変遷を重ねるが、一時はネズミの繁殖が著しく、夜道を歩くとネズミにつまづくほどだった。この地に限らず、そんな親たちの姿を見てきた農家一体の跡取りたちは、だから、農外所得をつぎ込んでまでも赤字申告の農業をやめない。そばで夫を支える妻たちの無言は、その非効率をも包み込んだ、いたわりの表れである。実に我が国の大半はそんな農地であり、日本の農業や、農業の持つ環境保全能力はこうして守られてきたのである。

その土地が荒廃している。跡取りもなく、託す地元後継者もない。改正農地法はこの問題を解消するため、“所有から耕作へ”の転換を推し進めている。国は企業の資本注入による農地保全を期待する。が、得てして資本主義は気まぐれである。新規参入したのも束の間、採算がとれないとすぐに撤退する様は、孫らが興じるTVゲームの“リセット”にも似る。私等の世代でいうと“ご破算で願いましたは”だろうか。収支への敏感な動きは資本主義のセオリーだが、“所有から耕作へ”は、この動きにピッタリなのである。しかし返還された農地は“更地”にすら戻らず、弄^{もてあそ}ばれ、無惨に荒らされた“つわものどもが夢の跡”

にさえ映る。つまり悲しいのである，虚しいのである，もどかしいのである。

だから老人たちは今日も耕す。先祖を耕す。生き甲斐を耕す。体が続く限り耕す。無理は危ないと言っても無理をする。動力源は利潤ではない。代々の意を継ぐ使命感であり，実りへの感謝であり，その実を食^はむ伴侶や子や孫の笑顔である。ところが，その実を喰^はらうのはイノシシであり鹿であり鳥なのである。伐採や，実をつけない植林で彼らの棲み家を狭めてきたのは私たちである。鳥獣らは致し方なく危険を冒して里山より人里へ下りてくる。しかし禁猟区や禁猟期の制約を設け，闇雲に捕殺もできなくしているのも私たちである。かくして鳥獣は産物のみならず，高齢者のささやかな夢や喜びまで喰^はい荒らす。時には人体に危害も与える。私は行政へも機会ある毎に訴える，「イノシシと人間，どちらが大切なのか」と。

私はこれまで，地域農業に携わる立場として様々な課題に取り組んできた。それは生活上のことであり，地域や組織の，農政のことであった。それぞれに地域と語り，組織と協議し，関係機関と模索を重ねながら対処してきたが，こと人口問題は難題である。少子化と高齢化は相関関係でもある。次世代がないことには次世代育成もはじまらない。そこで私はこの解決策を結婚問題に置く。特に若い農業後継者が集まる会では，「異性への積極的な話術の修得は，農業技術習得に勝る最重要課題だ」と説く始末である。なんとか家族のため，地域のため，日本のために頑張ってもらいたい。

さて，私はよく21世紀のキーワードとして“食料・水・環境・エネルギー・女性・心”を挙げる。冒頭の段畑に建つ碑には「父が砕き 童も運び 爺は築く 昼餉^{ひるげ}の芋に母のぬくもり」と刻んでいる。気づけば私も瓜^は食めば母を思い，栗食めば父を思う^{よわい}齢となった。殺伐とした社会には，思い遣^やる心がやたらとしみ入る。次にしみ入るのは食料ではないだろうか。食べ物の恩は忘れ難いものだ。今日もまた鳥獣被害の声を聞く。食べ物の恨みもまた忘れにくいものだ。老人のささやかな，あるいは若者の希望に満ちた夢を喰^はい荒らす猪らではなく，人の悪夢を食^はべると言われるバクなら歓迎するのだが。

(前 えひめ南農業協同組合代表理事組合長 <愛媛県農業協同組合中央会会長>

林 正照・はやしまさてる)